

乳牛への飼料用粃米（イネ SGS）多給技術

1 はじめに

飼料価格の高止まりの状況が続く中で、飼料費を引き下げするためには、畜産農家自らが、県産飼料である飼料用米を調達して自己の経営に取り入れていく必要があります。そこで、飼料用米の利用形態の一つであるイネソフトグレインサイレージ（以下、イネ SGS）について、分離給与方式で、泌乳中後期牛に多給する技術を検討したので紹介します。



写真1 イネ SGS

2 イネ SGS の特長

イネ SGS は、生粃を乾燥せずに破碎・密封しサイレージ化したものです。調製の手間はかかりますが、乾燥や粃すりが不要で屋外で長期間保管できるため安価です。また、粉碎した玄米や粃米に比べると、乳牛の第一胃内での消化が速くなります。

「イネ SGS」>「大麦・玄米・粃米（乾燥粃）」>「トウモロコシ」

3 濃厚飼料の3割・5割までイネ SGS を多給

イネ SGS を給与しない慣行メニューを対照区とし、濃厚飼料の27%（少給区）、46%（多給区）をイネ SGS で代替給与し、比較しました。「全飼料中」の配合割合としては、それぞれ16%、28%になります。

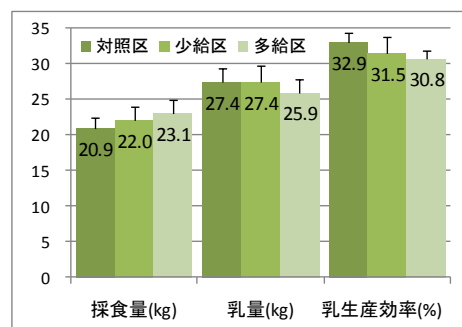


図1 採食量および乳量、乳生産効率

4 実用的な給与量は濃厚飼料の3割を目安に

試験の結果、以下のことが分かりました。

- ・採食量にほとんど差はなく、イネSGSの嗜好性は高い(図1)。
- ・イネSGSを多給しても、乳量や乳成分は従来と変わらないが、乳生産効率がやや低くなる傾向がある(図1、2)。
- ・第一胃内容液性状、血液性状など健康への影響は特にはない。

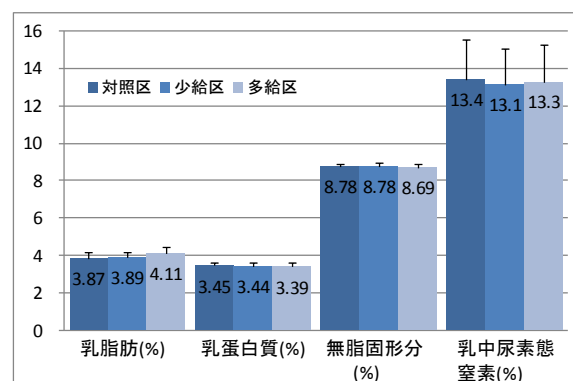


図2 乳成分

5 技術の効果およびコスト

イネ SGS の活用で、飼料費の低減が図られるとともに、輸入飼料への依存度は低くなります(図3)。多給区では約1割の飼料費削減が見込まれます。しかし、飼養管理の安全性や飼料効率を踏まえると、イネ SGS の農家での実用的な給与量は、少給区のレベル、すなわち濃厚飼料の3割までを目安とすることが望ましいです。

また、TDN ベースの飼料自給率は、対照区の34%から多給区では57%まで高めることができます。

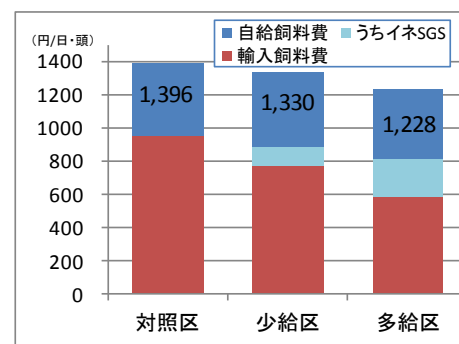


図3 飼料費の比較

6 技術利用の留意点

選り食いや盗み食いをさせない、トップドレスのまま放置しない（ほかの飼料と混ぜる）など、イネ SGS の採食量が急激に増えないよう十分な注意が必要です。

(畜試 酪農G 和田)